
茶恋

悲劇のM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

茶恋

【Nコード】

N7894D

【作者名】

悲劇のM

【あらすじ】

伝わるのは文字だけ。どうやってもこの気持ちが行くところの無い『チャット』。そのチャットを通して知り合った男女の恋の行方は？（作者の実体験を元にして作りまし）

茶恋 1

「うっ、くあぁ」

大きなあくびをするこの少年の名は佐藤雄二。

O県・N市に住む彼は、成績・中の中 趣味特技・特に無し 中流家庭で育つ、どこにでもいる普通の中学2年生である。

今日も長つたるい授業を終えて、小雨がぱらつく中、やたらと大きな傘をさして一人で帰路につく。

((帰ったらチャットでもやるっ))

チャットとは、顔も分からない人同士がパソコン等を通して会話を楽しむ一種の娯楽である。

唯一の趣味であるチャットの事を考えると、しぜんと足取りがはやくなる。

しばらく歩いて家の前につくと、ポケットから鍵を取り出し鍵穴に差し込む。

両親が共働きなので、この時間帯は家には誰もいない。

「ただいま」

誰もいない部屋に、雄二の声が響く。

小洒落た傘たてに傘を置いて、制服のまま自室に行き、パソコンのスイッチを押した。

約3分という長いパソコンの起動時間の間、無意味にキーボードやマウスをいじる。

やがて、起動時間が終わり、インターネットを開く。

慣れた手つきで「チャット」と打ち、エンターを押した。

そして、いつも行っているチャットルームに入った。

((ハンドルネームはどうしようかな))

ハンドルネームとはネットワーク上などで活動する時の別名である。適当なものが浮かばなかったので、本名である「雄二」をハンドルネームにして入室した。

やがて、チャット画面が出た。

雄二<<こんにちは

美紀<<お、こんちゃ

春名<<こんにちは

飛鳥<<こんちゃ

まずは適当な挨拶を交わした。

雄二<<みんな何歳？ちなみに俺は14の中2

春名<<14歳の中2だよ

美紀<<15の中3

飛鳥<<14の中2

((同年代が多いみたいだな・・・))

この時間帯は帰宅してきた中高生が多い。

それとは逆に、夜は大人達が集まり猥談が繰り広げられている。

美紀<<ね、みんなは好きな人とか恋人はいるの？

((学生は何で恋バナが好きなんだろうなあ・・・))
自分も学生である雄二が半秒考えた。

しかし、モタモタしていると目立たない存在になってしまつので、
急いでさっきの質問に答えを返す。

雄二<<ああ、俺はそういうのはいないよ

飛鳥<<中1の時から付き合ってる人がいるべ

春名<<あ、あたしはいないよ

美紀<<ええ、年頃の中学生がいけないわけないでしょがww
春名

この「w」とは、面白い時などに使う、（笑）と似たような意味を持つ記号である。

春名<<ほ、ほんとだってば〜

何故同じような答えを出した雄二には言わず、春名にだけそういう事を言うのか・・・

素朴な疑問を感じた雄二は咄嗟に発言した。

雄二<<おいおい、無理に聞き出すなよ〜

美紀<<雄二は春名の肩もつの〜？

雄二<<いや、そういうわけじゃ

春名<<雄二君・・・

なぜその時春名が雄二の名前を出したのか、その時の雄二にはよく理解できなかった。

そして、数秒おいて、春名が発言をした。

春名<<あたし、いまあたしの事をかばってくれた雄二君が好き！！

飛鳥<<のえ?!

美紀<<なんだこの展開w

雄二<<え、ちよつw

（（本当になんだこの展開は））
雄二の胸が高鳴る。

それにともない、脂汗が出てきた。

美紀<<ちよつとお、雄二はどうなの??

飛鳥<<女の子泣かせたら俺怒るよ〜w

雄二<<いや、その、あれさ・・・

何を言えばいいのか、わからなかった。

しかし、このような場面で下手な発言をしてしまうと皆の反感のよ
うなものをかってしまうので、雄二はノリで答えることにした。

雄二<<えっと、偶然だね。その、俺も春名の事が、、好きだよ
すると、3秒ほどで飛鳥が発言した。

飛鳥<<おおお、これはカップル成立？？

美紀<<そのようですねえ、飛鳥さん

正直、雄二も半分は冗談のつもりだが、自分を愛してくれる人が好
みのタイプの雄二にとっては、雄二のことを愛してくれている（現
段階では真意のほど定かではないが）春名に、少しだが惹かれてい
たのかもしれない。

そんな微量な春名に対する好意が頭の中で渦巻いている中、春名が
発言をした。

春名<<雄二君は、明日もここに来られる？

雄二<<え、ああ、俺はOKだよ

明日以前に、いま何を話せばいいのか、雄二は全く考える事が出来
なかった。

飛鳥と美紀は、雄二と春名に二人つきりで話せる場所を提供しよう
としているようで、発言を控えているが、雄二にはそれが辛かった。

（（何か喋らないと））

そう思った雄二は適当な発言をした

雄二<<あのさ、みんなは好きな人とかいるの？

飛鳥<<おまえ、それさつきも聞いたでしょーがw w

雄二<<え、あ、そっかw

美紀<<あんたは何やってんの！！

(ほんとに何やってんだろうなあ)(

自分の馬鹿さにため息を交えつつ、詫びの言葉をいれた。

雄二<<ごめんごめん、俺馬鹿だからw

飛鳥<<春名の前でカツコ悪

春名<<え、あたしはそんなこと思ってないからね

すると、美紀が発言した。

美紀<<ねね、みんなどこ住み？

雄二<<俺はO県

飛鳥<<H県だよ

春名<<あたしはT県

美紀<<へへ、みんな遠いな。あたしはK県。

丁度良い発言をしてくれた美紀に心の中で感謝した。

春名<<あ、ごめん、あたしそろそろ塾あるから行くね

美紀<<あれ、おつかれ

飛鳥<<またな

雄二<<あ、明日、この時間帯で大丈夫？

春名<<うん、全然大丈夫だよ

雄二<<そか、よかった。じゃ、この時間帯に待ってるからさ

春名<<ありがとう。じゃ、またね

春名さんが退室しました

こうして、春名と出合って最初の日は、大した事を話せずに終わってしまった。

雄二は、明日こそちゃんとした会話をする、と心に決めた。

しかし、何故初対面、しかも顔も分からないような人を想う事ができるのだろうか。

春名に対する好意は、少しづつ膨れ上がっていた。

そんな事を思っていると、飛鳥が発言した。

飛鳥くくなぁ雄二よ、お前が抱くものは、本物の愛ってやつか？

雄二くくなつ、馬鹿じゃねーの？そんなん違うってよww

急いで否定の意を示した。

美紀くくん、面白くなってきた！！

飛鳥くくよしつ、明日、俺達もこの部屋で見物しようぜ、美紀

美紀くくオツケ、いいよww

雄二くくあぁ？お前ら、んな事はやめろって

飛鳥くくふふ、明日が楽しみですなぁ、美紀さんww

美紀くくそうですね、明日何が起こるかな

美紀さんが退室しました

飛鳥さんが退室しました

雄二くくはぁ、俺も落ちよっかな

独り言を呟いていた時、突然誰かが入室してきた。

春名さんが入室しました

雄二<<え！？春名、塾じゃないの？

春名<<雄二君、好きだよ

それだけだった。

春名さんが退室しました

雄二<<えっと、俺もホントに退室しよう

そう一言だけ言い残すと、退室ボタンを押して退室した。

顔も分からない女の子に好きと言われ、雄二にはなんともいえない感情があった。

これまで、人を好きになる・好かれるといった経験には無縁だった分、心の動揺も大きかった。

茶恋 2

「ただいま」

母である【佐藤英子】が帰ってきたらしく、母のものである高い声が響いた。

「あ、おかえり」

雄二はすぐに返事をした。

英子は強引に雄二の部屋のドアを開けた。

「あれ？雄二が制服のままパソコンに向かっているなんて、珍しいわね」

自分の着ているものを確認した。

たしかに学校の制服だ。

いつもなら英子が帰ってくる前に私服に着替えているはずだが、今日はそれを忘れていた。

「洗濯するから、さっさと脱いで洗濯かごに入れておいてよ」

「はいはい」

すると英子は雄二の部屋をあとにした。

雄二は無言で制服から私服に着替えた。

手早く私服に着替えた雄二は、明日春名と話す時の話題を考えていた。

最近流行っている音楽や芸能情報など、普段の雄二には無縁な事を考えてはネットで調べた。

どれくらい時間がたったのか分からないが、窓から見える空は、既に濃い青色に染まっていた。

翌日、学校から帰るとすぐにパソコンを起動した。
起動してすぐにあのチャットに行った。

雄二をハンドルネームにして入室ボタンを押すと、すぐにチャット画面が現れた。

雄二<<こんにちは

春名<<あ、雄二君！昨日ぶりだね

雄二<<ああ、そうだな

そして雄二は昨日調べた事を話題にして春名との時間を過ごした。
春名も、雄二の質問に素直に応えたり、雄二の発言に対して相槌を打ってくれた。

途中、美紀と飛鳥が入ってきたが、場を察してくれたらしく、すぐに出て行ってくれた。

春名とチャットで過ごす時間は、何よりも楽しかった。

暫くして春名が言った。

春名<<ごめん、もう塾の時間だから落ちるね

雄二<<あ、また明日もここに来てね

春名<<うん、じゃあまたね

春名さんが退室しました

数秒置いて雄二も退室した。

そして、パソコンの電源を落とした。

茶恋 3

椅子から離れ、疲れた体をほぐす為に大きく伸びをした。

同じ姿勢を数秒間保った後、ベッドに倒れこんだ。

(あ、ご飯食べて寝なきゃ)

そう思い、ベッドから起き上がった瞬間。

ガシャッ!!

「いってーなこのくそババア!!」

何かが割れる音と共に少し歳の離れた兄【佐藤雄一】の叫び声が聞こえた。

母の英子と派手にやっているらしい。

このくらいの事は日常茶飯事だが、今のこのこと出ると間違いなくとぼっちりを食らうことになるだろう。

雄二は、晩御飯を我慢することにした。

それから数ヶ月の月日が流れた。

明日、春名と何を話そうか考えながら、雄二は昼の陽光に晒されながら眠りに落ちかけていた。

朝から始まった例の二人の喧嘩は激しさを増してきているが、雄二の気にする範囲外にあった。

「出てけ馬鹿息子!!」

「出てっつてやるよこんな家」

どうやら出て行くらしい。

最長記録は3日だが、今回はどうだろう。

最近バイトを始めたらしいので、安アパートでも探してそのまま帰ってこないというのも考えられなくは無いが、雄二にとっては何かと好都合にも思えた。

学校から帰ると、すぐに自室のパソコンに向かった。

早く春名に会いたい、その一心が雄二の歩速を速めた。

ドアを開けた瞬間、雄二は凍りついた。

無いのである。

そこにあるはずの物。春名との唯一の通信手段のパソコンが忽然と消えていた。

「嘘、なんで？」

思わず一人呟いてしまった。

「ただいま」

帰ってきた！

「母さん、パソコンどこいったの？」

焦りや不安、恐怖心まで混じった雄二の発する声は、明らかに震えていた。

「ああ、あれ？雄一が出て行くって時に一緒に持ってったわよ」

「は？嘘だろ？」

雄一は難しいからと、一年以上パソコンを使っていなかった。それ故雄二の部屋に置いてあったわけだが、どうして今になって・

「兄貴、どこに行ったか分からないの？」

「さあ、知らないわね。でも、出て行くときに同じ町の空気吸いたくない、とか言ってたわ」

一瞬言葉が出なかったが、雄二にはその言葉の意味が痛い程分かった。

「嘘だろ・・・」

とぼとぼと自室に戻り、枕に顔を沈めた。

春名とチャットが出来ない

ただでさえ会うことが出来ないのに、チャットの中ですら会えないなんて・・・

自然と、涙が出てきた。

（俺、何泣いてんだろ・・・）

顔もわからない、声を聞いたことも無い、それだけの関係。けど、春名が好き。

何で好きなんだろう？

.....

考え込んでいる内に、雄二は寝息を立てていた。

茶恋 4

春名くく雄二君、今日遅いな
飛鳥くく遅刻かあの野郎はw

時計を見ると、いつもの時間より30分は過ぎている。

春名くくごめん、そろそろあたしも塾あるから落ちるね

美紀くくおよ？じゃあね

飛鳥くくじゃな

今日は都合が悪いかもしれない、と無理やり自分を納得させてパソコンの電源を落とした。

そして、鞆に必要な物を入れて塾に行った。

((雄二君、どうしたんだろう？今日は都合が悪かったのかな)
どちらかが来ない等というのは、今日が初めての事ではないが、何か言い表せない不安を感じていた。

「春名、ぼけつとすんな！！」

「え？あ、ごめんなさい」

塾の講師の声ではっと我に返った。

に講師の言った事を必死にノートに書き写すフリをした。

「はい、じゃ今日はここまで」

講師の声が塾内に響いた。

聞き慣れた声だが、終わりの時の「ここまで」というのには毎回吃驚してしまう。

使った本等を戻して鞆を背負うと、「さようなら」と一言残して塾を後にした。

数時間ぶりに吸った外の空気は新鮮なものだったが、歩道を走っていったバイクのせいで排気ガスが多量に混じった不純物となった。

家に帰ると、遅い晩御飯を食べてすぐに床に着いた。

(今日は都合が悪かっただけ、明日はちゃんというよね)

雄二の事を思いながら、羊を数えた。

雄二<<春名、もうさ、俺達終わりにしよう

突然の雄二の発言に一瞬キーボードを叩くのが止まった。

春名<<雄二君、何言ってるの？冗談だよねw

雄二<<だってさ、会ったことも無いし、顔も見たこと無い。これからもずっとこの関係が続くんだよ？

春名<<嫌だ！それでもいいから、今の雄二君との関係は崩したくない

必死の抵抗からか、自然と涙が溢れて来た。

落ちた涙が、スリースキーを濡らした。

雄二くくじゃあな、早く俺の事忘れるよ・・・
春名くく嫌だよ、雄二君、いけないだよ

半秒後、無情な文字が画面に表れた。

雄二さんが退室しました

春名くく雄二君・・・

涙が、再びスリースキーを濡らした。

「うぁ！！！」

空が白かけてきている。

時計を見ると、6時を指していた。

「夢、だよね・・・」

言いよぶの無い不安を感じながら、目覚まし時計を7時にセットして、再び眠りについた。

茶恋 5

雄二がチャットに来なくなつて、既に2ヶ月が経っていた。

美紀くく今日で2ヶ月になるね

飛鳥くくそうだな・・・

春名くくそれでも、雄二はきつと来るよ

ただの活字なのに、春名の発言には威厳があつた。

美紀くくこのままずっと雄二を待ちつづけるの？

春名くく私は、いつまでも待つよ

春名の決意がそのまま文字として現れる。

美紀くくもう、終わりにした方がいいんじゃない？

飛鳥くく俺もそれがいいと思うよ。

二人の弁に、春名の心が微かに揺れ動く。

が、それも一瞬の事だった。

春名くくでも、でも・・・雄二は絶対に来るよ！！絶対に

そして、半ば強制的にパソコンの電源を落とした。

この時、美紀や飛鳥、そして春名が、これまでの会話を外部から見ている人がいるとは、予想しなかつただろう。

そして、その人間が雄二だという事も・・・

「何で、入室押さなかつたんだろう」

現在進行形で、数分前の事を悔やんだ。

これを後悔先に立たずと言うのだろうか。

「俺、春名の事嫌いになつたのかな・・・」

せつかく友達から2万で譲ってもらつたのに、という言葉を出そつとしたが、出なかつた。

俺、だめだな、これじゃ・・・

春名は2ヶ月もチャットで俺を待っていたのに、俺は。

もう、別れた方がいいのかな・・・

それとも、春名の気持ちに応えた方がいいかな・・・

・・・

葛藤と戦いながら考え抜いた末、答えを導き出した。

無情な、前者の方に。

静かな空から、急に雨が降り出した。

雄二の心の中にも。

茶恋 6

翌日

春名と楽しくチャットをやって過ごしたチャットルームに行った。飛鳥と美紀の姿は無かった。

ただ、ぽつんと、春名の姿があった。意を決して、雄二は入室した。

春名<<雄二・・・雄二君なの？

雄二<<ああ、覚えててくれたんだな、ありがとう

春名<<また会えて嬉しいよ・・・雄二君。私達、まだやり直せるよね？

春名がいきなり核心を突いた。

けど、もうやり直すことなんて出来ないんだ・・・

雄二<<ごめんな、俺、春名とやってけそうにない

春名<<何で、そういう事言うの？そういう冗談は嫌いだよ

雄二<<ごめん、春名・・・けど、これの方がお互い楽になれると思うんだ。

春名<<嫌だよ、そんなの・・・雄二君・・・

何故だろう。自分から言っているのに、涙が溢れ出てくるのは、春名と別れたくないからなのだろうか。

それでも、構わない。春名は、顔も分からない俺なんかと一緒にいたらだめなんだ。

雄二<<バイバイ、もう会えないかもしれないけど、元気でやって

ね。

春名<<もう、仕方ないんだね。それでも、さよならは言わないよ

そして、退室ボタンを押した。

あれから1年が経った

春名との恋で、自分でも分からないような何かを学んだ気がする。

新しい恋人は出来ただろうか。

だめだ。思い出さないと決めたのに、時々思い出してしまう。

そうだ。チャットでもやろう。

雄二は、『匿名』でチャットに入った。

玲<<こんにちは

徹也<<ういっす

匿名<<こんにちは

春名<<こんにちは

そこに、懐かしい名前があった。

けど、それが1年前に恋した人のはずはない。

春名<<今から1年前くらいにね、私チャットで恋愛してたの
徹也<<チャットで恋愛ってw

玲<<おい徹也ww

春名<<相手の名前は雄二っていうんだけど、今元気かな

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7894d/>

茶恋

2010年10月21日11時14分発行